

まじふ

Vol. 17 No. 1

2020. 5. 3

「癒し主イエス・キリスト」

主任牧師 中島 聡

「しかし、見よ、わたしはこの都に、いやしと治癒と回復とをもたらし、彼らをいやしてまことの平和を豊かに示す。」
エレミヤ書 三三・六

二〇二〇年、清水ヶ丘教会は、「神はわたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。」との年間聖句によって、主の祝福を確信してスタートいたしました。皆が、「ミッション三七〇」を第一宣教目標に、もう一度、礼拝の拡充を願う福音宣教に励むべく祈りを新たにいたしました。昨年、大型台風による被害を修復し、再び地区担当の活動を活性化させ、地区ごとの祈り会、地区集会、聖餐礼拝、訪問聖餐式に精力的に取り組んで参りました。聖隷横浜病院における「楽しい音楽とリラクゼーションのひととき」は、病院と教会が一体となり、教会員、音楽家、ギデオン協会横浜支部の協力をいただきつつ、望外の宣教の可能性を感じさせてくれました。子どもの教会はホールに満ち溢れるようになり将来への希望を力強く感じさせてくれました。

しかしながら、新年早々に新型コロナウイルスが発生し、瞬く間に世界中に感染が拡大、現在、教会は感染拡大防止のために自粛、休止状態にあります。「主よ、どうしてですか？」と問いかけるほど大きな痛みを覚えますが、私たちだけが痛んでいるわけではありません。これまでも教会は、第二次世界大戦下、大災害等において、宣教活動に試練の時を経験してきました。「主よ、どこにおられるのですか？」と深い嘆き悲しみ、痛みがありました。しかし、いついかなる時も教会は御言葉によって慰められ、励まされ、復興奮起を遂げてきました。

「汝ら静まりて、我の神たるを知れ。」(詩篇四六・一〇)、「われ山に向かいて目を挙ぐ、わが助けはいずこより来たるや。わが助けは天地を造り給える主より来たる。」(詩篇一二一・一、二)。

三〇〇〇年前のイスラエルの地において語られた主の御言葉が日本にも伝えられ、幾多幾重の艱難試練にあつても教会と信仰を守り抜いてきたのです。今、私たちも御言葉によって祈る、霊的な祝福に満たされて祈るべき時であることを強く示されます。

新聞のコラムに、「宗教行為が集団感染をもたらす：共に祈りをささげる営みが、むしろ悲しみを生んでいる」とあり、なんと耳が痛いことと思われました。しかし、続きがありました。「その皮肉を指摘するのは簡単だが、それで済むのか。元より、人間の生と死を見つめ、人々に救いや癒しを与えてきたのが宗教だろう。：宗教が力になることもあるのではないか。」と期

待の言葉で締め括られていたのです。今こそ、教会は、私たちにしかできない祈りを、それぞれの場においてささげるべき時なのです。

感染、重症化によって苦しみの内にある方々のために、愛する家族、友人が召され大きな痛みと悲しみの内にある方々のために、過酷さにおいて教会と比較にならない現状にある医療、福祉、保育施設、ライフライン、公共機関等、最低限必要な社会機能を維持するために日々労しておられる方々のために祈らなければなりません。私たちは決して落胆せず失望せず、祈りによって「地の塩、世の光」として仕えねばならない時なのです。それぞれの場において、毎の聖書朗読、祈りを大切にして参りましょう。「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」(ローマの信徒への手紙五・二一五)。私たちが神の愛に満たされて、使徒たち、初代教会の歩みに倣い、この苦難を乗り越えて参りたいと願います。

そして、「見よ、兄弟が共に座っている。なんと恵み、なんとという喜び。」(詩篇二三三・一)。礼拝、祈禱会に参加を願うすべての兄弟姉妹が共に座し、高らかに主を讃美し、すべての教会の営みと福音宣教を兄弟姉妹が共に担い、喜びに満ちて仕えることができる日を待ち望んで参りましょう。ハレルヤ！



「いちばん」の話

片平 貴宣 牧師

幼稚園で子どもたち接していますと、子どもたちが共通して好きなもの、好きな言葉があることに気づかされます。「おとうばん」「おんなじ」「だんごむし」などなど、同じ体験、同じ遊び、同じ言葉を通して共感し、相手を理解して行きます。

その中で僕が聞いていて、不思議に感じる言葉があります。それは「いちばん」です。園庭で遊んでいてお片付けの時間になると、部屋に戻る時に最初の子どもは「いちばん！」と言って幼稚園に入ってきます。けれどもしばらくするとまた同じように「いちばん！」と言って入ってくる子どもがいることがあります。なんならもう何人か「いちばん」がいることもあります。

大人目線でその様子を見てみると、あとから「いちばん！」と言ってくる子どもには「いいえ、あなたはいちばんではありません」と言いたくなるでしょう。そもそも「いちばん」が何人もいるのはおかしいと感じます。

あるいはもしかすると子どもたちなりににも文脈があつて、「一緒に遊んでいたお友達の中でいち

ばん！」と言っているのかもしれない。子どもたちに確かめたわけではありませんので、本当のところはわかりません。けれども、自分で自分を「いちばん！」と評価できるのは、子どもの持っている力だと感じます。

私たち大人にとって「いちばん」とは、それこそオリンピックで金メダルを取るような存在でないと、自分がいちばんであるとは言えません。そこまでは行かないにしても周りからの評価が伴ってないと「いちばん」であるとは言えないのです。

でも聖書には、「わたしの目にあなたは価高く、貴く／わたしはあなたを愛し／あなたの身代わりとして人を与え／国々をあなたの魂の代わりとする。」(イザヤ書四三・四)とあります。

すなわち、神さまからご覧になれば、一人一人が一番貴い存在だという事です。私たちに価値があるから一番だ、というのではなく、神さまが私たちに価値を与えてくださるのです。それはご自分の独り子の命すら差し出しても惜しくは無い、という価値です。

その価値に気づくなら、自信を持って自分が「いちばん」だと言えるはず。子どもたちの姿にも做つて、私たちも自分に一番の価値があると感謝して受け止めましょう。

<https://youtu.be/9P24Sq113Mc>

